

# 生産的労働について

—スミスの二重規定を中心に—

山田 秀雄

## I

アダム・スミスの生産的労働論については、マルサスがこれを『國富論』の礎石として評価したのをはじめとして、後續する多くの學者によってくり返し論議され、またマルクスの『剰餘價值學說史』によっていわば古典的な批判が與えられていることはあらためていうまでもないであろう<sup>1)2)</sup>。さらに最近においても、わが國の經濟學史關係者によって、あいついで、多くの解釋が發表されている<sup>3)</sup>。これらの解釋は、その問題視角において必ずしも同じではないが、いずれも、多かれ少かれマルクスのスミス批判に依據しながら、スミスの生産的労働の概念を明らかにしようとしたものである。これらの研究によって、スミス解釋に新しい光が投げられたことは確かである。しかしなお、スミスの生産的労働論については、特にこの問題におけるスミスからマルクスへの道を跡づけるためには、指摘すべき點が残されているように思われる。この覺書では、このような意味で、あらためて生産的労働論におけるスミスの立場と問題提起を検討してみたいと思う。

周知のとおり、スミスが、生産的労働と不生産的労働との區別について解説しているのは、『國富論』第2編第3章「資本の蓄積について」と、第4編第9章「農業主義」においてである。スミスの説明は、この兩方において、必ずしも同じではないが、結論的にいえば、これまた周知のとおり、スミスは、生産的労働を、一方では、資本と交換されて資本家のために利潤をもたらす労働(第1の規定)として、他方では、價值をつくる労働、

1) T. R. Malthus: Principles., 2nd. ed., 1836, (Repr., 1936), p. 44. 依光良馨譯『經濟學原理』(上) p. 59.

2) K. Marx: Mehrwert., 5 Aufl., 1923, Bd. I., SS. 253—428. 長洲一二譯『剰餘價值學說史』, 第1冊, p. 188 以下。

3) そのおもなものとしてはつぎの3つをあげることができる。

遊部久藏「『生産的労働』について」(「三田學會雜誌」第45卷第5號)

藤塚知義『アダム・スミス革命』, 第4章第2節「スミスにおける『生産的労働』の概念」, pp. 129—167. 内田義彦『經濟學の生誕』, 後編6「資本の蓄積と再生産の理論」2, p.305 以下。

または商品を生産する労働(第2の規定)として、いわば二重に規定しているのである。もっとも、スミスには、さらに、物質的富、または使用價值を生産する労働という第3の規定があることを指摘する解釋も少くない<sup>4)</sup>。これは、スミスの生産的労働論が、こうした考え方から出發している點を特に強調した解釋ということができよう。私は、のちにのべるような意味で、第3の規定は第2の規定に含めて考えるのが妥當だと思ふ。しかし、もともとスミスの生産的労働に關する概念規定として2つをとるか3つをとるかは、どのような問題視角からスミスを解釋するかにかかっているのであって、どちらかを固執する必要はない。問題は、スミスにおける諸規定を併列的に指摘することだけにあるのではないからである。いうまでもなく、第1の規定は資本主義的生産の立場、第2の規定は商品生産の立場、そして第3の規定はいわば超歴史的な立場からみた生産的労働の概念規定である<sup>5)</sup>。スミスの説明が混亂している理由は、結局のところ、スミスが生産的労働の歴史的規定について理解していなかったという點に歸着する。けれども、スミスの説明はただ混亂しているだけではない。この混亂のうちにも、スミスなりの一貫した主張をみとめることができるのである。したがって、生産的労働に關するスミスの考え方と問題提起を適確に握むためには、これらの規定がどのような關連をもって主張されているかを明らかにすることが重要である。

## II

まずはじめに、第1の規定と第2の規定がどのような關連をもって二重に提起されているかという面から、第2編第3章冒頭におけるスミスの説明を検討してみよう。このパラグラフは長文であるが、敘述の進行につれて論點が微妙に移ってゆく経過を示すために、つぎに全文を掲げることとする。

「労働には、それが加えられる對象に價值をつけ加える種類と、そういう結果を生じない種類とがある。前者は價值を作るのであるから、これを生産的労働と名づけ、

4) 遊部氏の前掲論文がその代表的な例である。

5) 遊部氏の前掲論文参照。

後者はこれを不生産的労働と名づけてよい。かくして、製造工の労働は一般に、かれが工作する材料の価値に、かれ自身の生活維持の価値とかれの主人の利潤の価値とをつけ加える。これに反して、召使の労働はいかなる価値をもつけ加えない。製造工はその賃銀をかれの主人から前貸してもらっているのであるけれども、それらの賃銀の価値は、一般に、かれが労働を加えた対象の増大した価値のうち、利潤を伴って、回収されるのであるから、実際上は、主人には一文の費用もかからないのである。しかしながら、召使の維持は回収されることがない。人は多くの製造工を使うことによって富み、多くの召使を維持することによって貧しくなる。といて、後者の労働も価値があるのであって、それに對する報酬は前者と同様に當然のものといわなければならない。ただ、製造工の労働は、ある特定の対象または販賣すべき商品に固定しかつ體現されて、その労働がなされた後も少くともしばらくはなくなるのである。それは、いわば、いつか必要が起ったときに使うために貯藏し、蓄積しておかれる一定量の労働である。この対象は、あるいはそれと同じことであるが、この対象の価値は、後日必要に応じてその生産にはじめに要した労働と等しい量の労働を動員することができるのである。これに反して、召使の労働は、ある特定の対象または販賣すべき商品にけって固定しまたは體現されるものではない。かれのサービスは一般にそれが行われた瞬間に消失するのであって、めったにその足跡または価値をその背後に残さない。そして後日、その代りとして同量のサービスを獲得するというようなことはできない<sup>6)</sup>。」

ここで、スミスは、生産的労働者の例として、資本家の下に働く製造工(manufacturer)をあげ、不生産的労働者の例として、主人の下に働く召使(menial servant)の例をあげている。そして、製造工の労働が生産的である理由を、最初は、それが対象に価値をつけ加える——材料の価値に賃銀の価値と利潤の価値をつけ加える——という點に求め、後半では、その労働が特定の対象または賣却できる商品に體現され、その労働がなされたあともしばらくはなくなるという點に求めている。この後半の規定は、その労働の維持に支出された価値と同量の価値を再生産する労働を意味するから、要するに、価値を増殖する労働(第1の規定)と、価値を維持するにすぎない労働(第2の規定)とが、召使の労働との對比において、等しく生産的労働として主張されているわけ

6) A. Smith: *Wealth of Nations*, Modern Library ed., pp. 314—15. 大内兵衛譯『國富論』, 第2分冊, pp. 105—6.

である。これは論理の飛躍であるが、スミスの敘述を辿ってみると、この飛躍は、スミスが資本家の下に働く製造工から出發しながら、途中から、この同じ製造工を單なる商品生産者として説明しているところからきている點が明らかになる。

ところで、以上のように、スミスの二重規定の背後には、資本主義的労働者と單なる商品生産者との混同があることが明らかになったとしても、スミスの問題意識に即していえば、第2の規定において、スミスは單純な商品生産を念頭においているのではないことを注意しなければならない。この點について示唆に富んでいるのは内田義彦氏の解釋であるから、ここに簡単にふれておこう<sup>7)</sup>。結論的にいえば、スミスが主張しようとした第2の規定における「価値の維持ないし存続」という意味は、資本主義的單純再生産のことであり、そこには労働者による剰餘価値の生産と、生産された全剰餘価値の資本家による個人的消費が含まれている、というのが内田氏の解釋である。なぜなら、スミスがケネーに對抗して、工業階級は、消費された価値と同量の価値を再生産するから生産的であるというとき、スミスは、再生産される価値のうち、誤ってではあるが、利潤もまた支出として含めている。これは、スミス自身の、「もし、かれら〔職工〕の製作物の代價が、かれ〔資本家〕が自らに前拂いするところの生活維持費を償い、かつまた、かれが、かれの職工に前拂いした原料、用具、および賃金を回収するに足りないならば、それは明らかにかれが投じた全支出を回収しないのである<sup>8)</sup>」という説明が端的に證明している。このようにして、第2の規定においても、剰餘価値の生産がスミスの念頭におかれているのであり、スミスは、第1の規定と第2規定を通じて、生産的労働をもって資本主義的再生産の基本的モメントとして捉えていた、というのが内田氏の解釋の要旨である。

確かに、上掲の例においては、事實上、生産的労働者による利潤の生産と、資本家によるその個人的消費が、投下全支出の回収に含まれている。ついでにいえば、これと全く同じ考え方は、第3篇第5章で農業労働者の生産性を説明する際にも出てくる。けれども、第2の規定をもって上記のように解釋できない説明も、スミスのケネー批判の中にはみられるのである。

そこで第2に、スミスのケネー批判について検討してみよう。第4篇第9章におけるケネー批判は、主として、ケネーが工業階級を不生産的階級と名づけたことに對す

7) 内田氏前掲書参照。

8) Smith, *ibid.*, p. 631. 大内譯, 第3分冊, p. 442.

る反駁であるが、その批判は5項目に別れている。そのうち生産的労働の規定に直接関連をもっているのは、はじめの3項目である。まず、前述の内田氏の解釋とは對立するような説明がみられる第3項をとりあげてみよう。

「第3に、いかに考えても、工匠、製造業者および商人の労働が、社會の眞實の収入を増加しないとはいえないようだ。……かりに1例をとって、收穫終了に續く6ヵ月のうちに、1人の工匠が10ポンドの價のある工作をしたとする。かれは、たとえこの間に穀物その他の必要品を10ポンド分消費したとしても、なお、かれは、この社會の土地および労働の年々の生産物に10ポンドを眞實に加えたのである。けだし、かれは穀物その他の必要品よりなる10ポンドに價する半年間の収入を消費している間に、かれ自身か、または第3者のために、同額の半年間の収入を購しうる價値の作物を作りあげたからである……<sup>9)</sup>」

ここには、正確に、工匠が個人的に消費した價値を維持する點が強調されている。あるいは、工匠の作り出す價値は、かれ自身の収入か第3者(雇主)の収入かのどちらかの價値と等しいのであって、兩方を含む餘地がないのである。ここでは、資本に雇われる賃労働者も、獨立の生産者も、ともに、賃銀と等しい量の價値を再生産することによって、生産的労働者とみなされているのである。

それでは、ケネー批判の第1項と第2項はどうか。スミスは、違った表現をとっているが、内容的には同じことをのべている。すなわち、第1項は、工業階級が、少くとも、それ自身を「維持し雇傭する資財または資本の存在を繼續させる」がゆえに生産的であり、第2項は、「工匠や製造業者や商人の労働」が、召使の労働と違って、かれらの賃銀ないし生活資料を回収できるような商品に自己を實現するがゆえに生産的だという主張である。かくして、スミスのケネー批判を一貫する立場は、商品を生産することによって、賃銀を再生産する労働を生産的労働とみる第2の規定にもとずいていることが明らかになる。しかも、ここでは、スミスは、剰余價値の生産ではなくて、可變資本を再生産する労働をもって生産的労働とみなし、かつこれを資本主義的再生産のモメントとして考えているのである。

ところで、眼を轉じて、第3に、スミスの不生産的労働に関する説明にふれておく必要がある。この面から、さらに生産的労働の考え方をはっきりさせることができるからである。スミスが不生産的労働者の代表例として

召使をあげていることは前述したが、そのほかに、不生産的労働者には、スミスによると、君主、官吏、陸海軍人、牧師、法律家、醫者、文士、俳優、音樂家、オペラ・シンガー、オペラ・ダンサーなどが含まれている。そして、かれらが不生産的労働者である理由は、その労働が、いかに有用であり、また賃労働として價値をもっているにしても、その維持に支出された價値を回収できるような商品に體現されることがないからである。これは、上述した第2の規定の論理であるが、要するに、不生産的労働は、一括して、それが行われた瞬間に消滅するサービスとして、物質的生産に全く関係がないものとみなされている。したがって、スミスは、かれらが「他の人々の勤勉の年々の生産物の一部分によって維持される」ということをつねに強調する。つまり、不生産的労働の特徴が、いわゆる費用のかかる物質代謝を前提にしている點が指摘されるのである。このようにみてくると、スミスにおける生産的労働と不生産的労働との區別は、元來、物質的富の生産と消費のバランスの問題から出發していることが明らかになる。いいかえると、物質的富を生産する労働が特に生産的といわれるのは、本源的には、それが物質的富の再生産のモメントとして考えられているからである。

さて、最後に、資本蓄積論の理論的展開においては、生産的労働はどのように規定されているかをみておこう。蓄積論は、いかなる國の年々の生産物も、土地または生産的労働者の手から出てくるときは、2つの部分、すなわち、第1に資本を回復する部分と、第2に収入(利潤および地代)を構成する部分、に分けられるという前提から出發する。まず、資本を回復する部分は、「直接に生産的労働者でないものを維持するためにはけっして使われぬ。それは生産的労働者の賃銀のみに支拂われる。」なぜなら、「ある人がその資財の一部を資本として使用するときは、その高がどれほどであるにしろ、かれは常にそれを、利潤とともに、回収することを期待する<sup>10)</sup>」からである。ここでは、生産的労働は、資本と直接に交換されて、賃銀を回収し利潤をもたらす労働として規定されている。つぎに、資本の蓄積、つまり収入を節約して資本に追加する場合についても同様である。すなわち、富裕な人の収入がただ費消される場合には、「怠惰な賓客や召使によって消費され、かれらはその消費の代りになにもものもあとに残さない。ところが、この人が年々貯蓄するその部分は、利潤をえるために直ちに資本として使われるのであって、その消費される方法も等し

9) Smith, *ibid.*, pp. 639—40. 大内譯, 同, p. 457.

10) Smith, *ibid.*, p. 316. 大内譯, 第2分冊, p. 109.

く、その消費される時期もほぼ同じであるが、消費する人の種類は別で、すなわち、それは労働者、製造工および工匠であり、こうした人々は、かれらが年々消費する価値を、利潤とともに、再生産するのである<sup>11)</sup>。」

このように、蓄積論の説明においては、主として、生産的労働の第1の規定がみられるのである。

### III

以上、スミスが生産的労働をどのような論理によって二重に規定しているかを明らかにした。スミスがかかる二重規定を自覚しなかったのは、すでに指摘したとおり、生産的労働の形態規定性を明確に握っていなかったことを意味する。それゆえ、マルクスのスミス批判は、生産的労働の形態規定性を明らかにすることを中心として展開されている。つまり、資本主義的生産の見地からみて、なにが生産的労働であるかという視角から、スミスの生産的労働の概念が徹底的に批判される。なぜなら、生産的労働の形態規定が出てくるのは、「労働の素材的成果からではなく、すなわちその生産物の性質からではなく、また、具體的労働としての労働の成果からでもなくて、それらの成果が實現される一定の社会的形態、社会的生産諸関係から<sup>12)</sup>」だからである。したがって、資本家に雇われて働く歌手は、それ自身の賃銀を補填し、利潤をうむかぎりにおいて、たとえそのサービスが、歌手から物として分離した姿をとらず、価値構成部分として商品に入り込むことがなくても、生産的労働者であることが明らかにされる。この意味で、物質的商品を生産する労働をもって生産的とみるスミスの第2の規定は、本質をついていない點が批判される。

けれども、問題はここにある。いうまでもなく、これは生産的労働の形態規定性を徹底させるための批判であって、この面からだけマルクスの生産的労働論を律することはできないからである。マルクスはスミス批判の「付論」において、すべての演出的藝術家、俳優、教師、醫者、牧師等のサービスのように、商品としてのサービスの生産が生産行為から分離できない場合については、「資本主義的生産様式は、ごくわずかな範囲でしか行われず、事の性質上、2, 3の領域でしか行われない。……この分野での資本主義的生産のこれらすべての現象は、生産の全體とくらべれば全く重要でないから、全然考慮外におくことができる<sup>13)</sup>」とのべている。スミスは、

上述したように、はじめから、これらのサービスのあつるものが資本の下に包攝される事實を無視した。しかしまた、スミスの論理では、これらのサービスが資本の下に包攝されることはありえないのである。たとえサービスが賃労働の形態をとっていても、そのサービスは物質的な商品に對象化されず、したがって、利潤はもとより賃銀も回収できないからである。いうまでもなく、スミスは物質的富を商品として生産する産業資本の立場をあらわしている。だから、不生産的労働の特徴をいわゆる費用のかかる物質代謝を前提にするという點にみているのである。そして不生産的労働がこのような性格をもっているかぎり、その費用は生産の冗費として、總産業資本の再生産および擴大再生産に對する蠶食を意味することになる。それゆえ、スミスは産業資本の立場に立つことによって第1の規定(形態規定)と第2の規定(實質規定)とを無媒介的に統一したということができよう。そしてこの無媒介的な統一が、ほかならぬマルクスにおいて、意識的な統一にまで高められたと考えることができるのである。したがって、スミスとマルクスとの間には、もちろん問題把握の上で大きな差異がみとめられるとしても、原則的には、マルクスはスミスの線上を歩くものといっても必ずしもいいすぎではないであろう。

だからといって、スミスの生産的労働論をマルクスの生産的労働論の立場からわりきってしまうことには多くの問題がある。問題はむしろ、マルクスからスミスへではなくて、スミスからマルクスへの道を明らかにすることにあるといわなければならない。

まず、スミスとマルクスに共通するものは、産業資本の觀點である。あるいは、産業資本の再生産の觀點である。いかなる労働が生産的であり、いかなる労働が不生産的であるかという問題は、いかにしたら資本の再生産、特に蓄積が可能であるかという問題をぬきにしては考えられない。ただ単に生産的労働および不生産的労働一般に關する論議というものは、それ自身不毛であろう。この問題はスミスが正しくとり上げたように、資本の再生産および擴大再生産の裏づけとしてのみ具體的な意味をもつものであり、それがやはりマルクスの問題のとりあげ方でもあった。しかも、重要なことは、それが、基本的には、産業資本の觀點からの問題提起であったということ、この點をまず正しく認識する必要がある。

それでは、この問題についてマルクスをスミスから區別するものはなんであるか。あるいは、スミスの不明確な諸規定の混在からマルクスによる明確な諸規定の統一にまで發展させたものはなんであろうか。これについて

11) Smith, *ibid.*, p. 321. 大内譯, 同, pp. 118—19.

12) Marx: *Mehrwert.*, Bd. I., S. 259. 長洲譯, 同, 195.

13) Marx, *a. a. O.*, SS. 425—26. 長洲譯, 同, 252.

は、まず第1に、マルクスにおいては生産的労働の形態規定と實質規定との統一的な把握が意識的に行われているという点をあげなければならない。これはあらためていうまでもなく、商品における価値視點と使用価値視點との統一、生産過程における価値増殖過程と労働過程との統一、資本の有機的構成における価値構成と技術的構成との統一など一連のマルクスの把握様式に對應するものである。

第2に、スミスの資本蓄積論は、産業資本の再生産の理論であるとしても、それはけっしてマルクスの意味における蓄積論でもなければ、再生産論でもなかった。いうまでもなく、マルクスにおいては、再生産過程は生産過程と流通過程との統一である。ところが、スミスには資本の生産過程の分析がなく、資本の流通過程の分析もほとんどない。だから、生産過程と流通過程の統一としての再生産過程がスミスに見出しえないのは、けっして不思議ではない。スミスの生産的労働に関する論議が混乱を示しているのは、この點からもよく理解できるのである。

周知のとおり、マルクスの論議が生産過程の契機に即して行われているかぎり、すなわち、『資本論』第1巻にかぎりの、なにが生産的労働であり、なにが不生産的労働であるかということについて、疑問の余地はない。ところが、『資本論』第2巻や第3巻に進むにつれて、この問題に関するマルクスの説明にはなお不明確な個所がみとめられるのである。たとえば、交通業や倉庫業における労働、商業使用人の労働に関するマルクスの説明については、いまなお論争が行われている。これはマルクスによる問題の展開が途中で打切られているためだと解されるのであるが、しかし、ここに、スミスの第1の規定と第2の規定とがいわばふれあう限界點の問題があらわにされていることを注意しなければならない。つまり、スミスが論理的な飛躍によって併存させた諸規定をマルクスの方法によって立體的に再構成するにあたって、生産的労働と不生産的労働との限界點に立つものが、やはり足を出しているのであって、そこにスミスが素朴な

形で行った問題提起の意味があるといわなければならない。

すべて限界の問題は全體の問題につながっている。リカードオもマルサスも、ともに、この問題に気がつかなかった。というのは、かれらは、それぞれ、生産的労働に関するスミスの2つの規定について反省するところがなく、いずれか一方へかたよる傾向をもっていたのである。リカードオやマルサス以後は、むしろこの問題は變質した。かれらは生産的労働をいわゆる精神的労働と同一視することによって、産業資本の立場に立っていたスミスのなさを失ったということができよう。

生産的労働の第1の規定(形態規定)と第2の規定(實質規定)とは結びつけて考察されなければならない。形態規定の面からいえば、生産的労働は個別的資本の觀點から把握される。けれども、これはなお一面的な考察である。いうまでもなく、個別的資本にとって生産的な労働が社會の總産業資本の觀點から必ずしも生産的であるとはかぎらないからである。もともと、資本家に雇われる歌手のサーヴィスが、資本を生産する労働として生産的であるといわれる場合、それは、同じく資本を生産する製造工の労働が生産的であるのとはおのずから違った意味をもっている。この場合の歌手のサーヴィスは、スミスが固執したように、価値を形成する労働ではないのである。もし生産的労働の形態規定と實質規定との間に矛盾が起るとすれば、この矛盾の解決のためには結局においてその實質規定が批判の據りどころとしてとり上げられなければならないであろう。生産的労働の實質規定は、これをマルクスの考え方に即していえば——これはスミスが暗示した考え方であるが——、社會的總労働の觀點からの考察を意味している。すなわち、個別的労働者の労働は、社會的總労働の中でどのような地位を占め、どのような役割を果しているか、これが、生産的労働について考察する際の最後の批判的基準となるべきであろう。もちろん個々の労働について具體的に判定することは容易ではないが、しかしここでは原理的な考察以上に進むことはできない。